

彰義隊

児玉 寛嗣

日光街道を下ると千住大橋の手前に円通寺というお寺が見える。彰義隊にゆかりのある寺だ。「賊軍」として放置されていた彰義隊士の遺体をこの寺の住職が火葬した。上野寛永寺にあった黒門が移設され、彰義隊士の墓もある。

慶応四年五月十五日、上野・寛永寺に立てこもっていた彰義隊に新政府軍が攻撃を仕掛けた。主力部隊は、今の上野公園の入口、京成上野駅辺りにあった黒門から攻め込んだ。しかし、抵抗に手を焼き、最初は彰義隊がむしろ優勢だった。これに業を煮やした大村益次郎は佐賀藩にイギリスから購入した最新鋭の大砲の使用を要請した。佐賀藩は海戦や攻城用で殺傷力が強いので討伐に使うのは

忍びないと躊躇、しかし、維新への出遅れに焦っていた江藤新平の主張で、今の東大、加賀藩邸の敷地に設置した砲台から撃った。大砲の射程は三キロ、一キロ先の上野の山は撃ちごろの距離だった。彰義隊は畳を重ねて盾としたが、小銃は防げて、砲弾は畳を紙のように破り、瞬く間に隊士の死体の山が出来て、勝負は一日で決した。大砲の提供で佐賀藩が「薩長土肥」の一面を占めることが出来たと言われている。

彰義隊の生き残り隊士の後日談。



黒門が破れ、彰義隊は討ち死に。サア志ある者は切腹。

再挙を計る者は逃亡、何しろうかうかしちゃいられぬと、花屋へ飛び込み、「彰義隊だ、匿ってくれ」と頼んだが「どういたしましてお困い申すどころか一刻も居て下すっては」というので「けしからんことを言う。年来徳川家のご恩沢を蒙りながら」と一刀ずばり引抜くと、家中縮みあがって着物と花屋の道具を差し出したので、花屋に化けて落ち延びた。

江戸には新政府をよく思わない者も多く、戦いがエスカレートしていたら、町は火の海と化していたかもしれない。短日で決したことが江戸の町を救ったとも言える。黒門に残る無数の弾丸の跡は戦いの凄まじさを物語る。門の後ろには夏草に埋れた隊士たちの墓。その墓に頭を傾けた。

